

通俗的な時代劇では虚無僧は隠密で、「むっ、怪しい奴」、と台詞までお決まりだ。間諜の要諦は目立たないことで、怪しい奴では隠密仕事ができまい。悪魔やサタンも同じで、風刺画のような牙と角、鋭利な尻尾があったりすると、「おっ、サタンじゃないか」と注目されてしまう。

だから有能な悪魔は高潔さや堅実さを装っている。高潔でありたいキリスト者は、これに引っかかりやすいのではないか。

「サタンが～イスラエルの人口を数えるようにダビデを誘った(歴代上 21:1)」。ダビデ王はほいと乗ったが(21:2)、冷静な側近ヨアブは訝しんだ(21:3,6)。サタンが奨めた人口調査は何のためなのか。人頭税でくまなく徴収し、防衛力を強化(21:5)、王国の安寧をめざす。

初期イスラエルは部族連合で、王国経営のためのきつい徴税はなく、戦いは農民兵。しかし特権階級のない神聖政治は(サムエル上 8:6)、時代の要請から王国制度に移行した(8:22)。

サタンは安定した統治のために「お金」をちらつかせた。御受難へ踏み入るイエスへの「香油注ぎ」でも、お金がからむサタンの仕業が予感させられる。

エルサレム近郊のベタニア(ヨハネ 12:1)。ここは甦ったラザロ(11:43~44)と、その姉妹マルタとマリアの家だろうか(12:2)。

マリアが数百万円もする香油をイエスの足に注ぐと、イスカリオテのユダはいかにも良識ある反応をする。「なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか(12:5)」。ユダの中にサタンが入るのは少し後だが(13:27)、このもっともらしい良識もサタンの仕業ではないか。

弟子たちの金を横領するより(12:6)、いっそう陰湿なサタンの企みが暗示されている。

金を無駄に使わず「貧しい人々に施す(12:5)」。高潔で立派なおこないだ。教会もこうありがたいし、施しに熱心な教会は少なくない。奉仕や施しそれ自体は善だろう。だが教会の使命として貧しい人々に「施さねばならぬ」、と強要される空気(力)になって来たら、それは息苦しいサタンの効力。

では、昂った感情から財産を一瞬にして「無駄にした」マリアはどうなのか。常軌を逸した彼女のふるまい。

こんなマリアをじっと見つめていると、どことなくイエスに寄り添っている行為に思えて来る。

「イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた(12:2)」。ラザロの甦りを祝う席でもあり(12:1)、さぞや賑やかで喜びに溢れていただろう。

この明るい宴席の真ん中に、ぼっかり空いた暗い穴がある。宴席の最中、香油を注がれたイエスは言った。「わたしの葬りの日のために(12:7)」。喜び溢れる場でもあり、貧しい人々への施しという良識に「そりゃ、もっともだ」と同調する者には分からない。

「わたしの葬りの日」を間近に予感しているイエスは、暗い孤独の内にあつた。ところが一人マリアにとっては、イエスの孤独があまりに痛ましく、そこへ全財産の香油を注いだのだ。

マリアはどこに香油を注いだのか。「イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった(12:3)」。弟子の足を洗う僕イエスと二重写しになる(13:3~5)。

マリアの非常識な行為は、「洗足」という神と人との非常識な結び目を示している(13:8)。マリアのように受難の暗さに踏み込むと、宴席のもう一人の主演が目に入る。

賑やかな宴席にいて何も語らないラザロ(12:1~2)、沈黙したままの復活の徴だ。



《おまけのひとこと》

サタンは人間より賢い だから正体は見つけられぬ だが 人間の中にいるサタンの働きは分かる 善意の裏に潜んでいて見極めにくいが 聖霊の風が吹き抜けると その衣がちらちらと揺れている